

イギリス産業革命期の幼児教育(三)

ウィリアム・ラヴェット

労働者階級の権利の確立をめざして



久保いと

普通選挙権獲得運動と労働者教育運動

イギリスでは一八二〇年ごろから景気はしだいに回復し、それまで政権を担当してきた保守トーリー党の内部にも自由主義勢力が力をもちはじめ、その結果、自由貿易主義や労働者にたいする弾圧法を廃止するなどの転機をもたらしました。そのころは、トーリー党もホイッグ党も議員は貴族や地主が占めていました。しかし、あたらしい工場制生産の発展によって急激な人口移動がおこり、そのために過疎になった選挙区ができた。反対に、新興大工業都市が独立した一選挙区とさえみなされなかつたり、というような不合理な事態がおきました。こうして、選挙区における人口の不合理と、選挙資格における財産

上の制限にたいして、とくに一八三〇年のフランス七月革命以後、選挙法改正運動が活発となってきました。ホイッグ党は、労働者にも現行選挙法の不合理とその改正をよびかけながら、共闘しつつ改正運動をすすめました。その後ホイッグ党が政権をにぎり、選挙法改正案は、ついに一八三二年六月議会を通過しました

改正選挙法による有権者は、地方の選挙区では年賃貸料一〇ポンド以上支払う借地人と年収五〇ポンド以上の農民、都市の選挙区では年賃貸料一〇ポンド以上の家屋借家人のすべてとし、人口にみあった選挙区の改正をして以前よりも公平に議員が選出されるようにしました。この結果有権者は激増し、しかも新興工業地帯からの議員選出を可能にして、新興産業資本家

の発言権を強化することになりました。けれどもあいかかわらず上記のような財産制限があったため、貧民労働者にたいしては選挙権は拡大されてはいませんでした。期待をうらぎられた労働者側の怒りは爆発し、より徹底した改正をのぞんであらたな普通選挙権獲得をめざしてはげしく動き出すこととなります。

最初にたちあがったのはオーエンです。オーエンは一八三三年一〇月に労働者団体の代表者会議をひらき、その席上で労働者組合の連合体を結成しようといよびかけ、翌年二月に「労働組合全国総連合」を組織しました。これはイギリスではじめての全国労働組織でしたが、一年たらずで解散してしまいました。その理由は、組織そのものがルーズであったこと、運動をすすめていくうえで政策の対立があったこと、それに政府の弾圧政策のためでした。オーエンは深く失望して、これ以後労働組合運動からはなれることになりました。しかしこれを契機として、労働者の団体は、労働条件の改善と普通選挙権の獲得のために、組織的な活動をしはじめたのです。

ラヴェット (William Lovett, 1800~1877) は、すでに一八二八年からオーエンのロンドン協同商業組合のマネージャーとして彼の仕事を支えていたのですが、いまやラヴェットがオーエンのあとをうけて労働組合運動をすすめる、一八三六年には「ロンドン労働者協会」を結成、これがチャーチスト運動の母

体となるのです。この協会の目的は、合法的手段によつてすべての階級に平等な政治的社会的権利を得させること、若い世代の教育を振興するためにあらゆる努力をすることでした。彼は普通選挙法のための集会・請願・女王へのアドレスなど、いろいろの活動をしましたが、一八三八年には有名な『人民憲章』(People's Charter) を発表しました。人民憲章は成人男子の普通選挙法の実施、議会の毎年召集、平等選挙区制、無記名投票による秘密選挙、議員の財産資格撤廃、議員の歳費支給を要求したもので、この運動はチャーチスト運動とよばれるようになりしました。

チャーチスト運動は全国にひろがり、デモ・請願・暴動があいつぎ、政府はこれを強硬に弾圧しました。一八三九年七月のパーミンガムの暴動事件でラヴェットは逮捕され、一年間獄中生活をおくります。その後も三〇年代から四〇年代にかけてチャーチスト運動は激しさを増し、一八四八年のロンドンにおける示威運動と、政府の徹底的な弾圧にまですすむのです。

ラヴェットは出獄した年(一八四〇年)に『チャーチズム』という書物を出版しました。これは労働者が普通選挙権を獲得したあとで、その政治的権利を十分に行使できるように労働者教育を準備するようよびかけたものでした。そして、これ以後ラヴェットはラディカルな仲間たちとわかれて、労働者教育運

動にうちこむのです。ラヴェットは、労働者階級の政治的関与へのうらづけとして、労働者がそれのみあうだけの教養を獲得していることを必須条件と考えていました。すでにオーエンやウィルダースピンのところでみたように、当時のイギリスの労働者たちはまったく無知で非教育的な状態に放置されていました。ラヴェット自身も下層階級の出身者として、はたらしながらの独学によって知識を獲得した人です。労働者たちが自らの政治的権利を主張し、それを正当に行使できるためには、知的教養と思考力・判断力を身につけていなければ内実のないものになってしまうと確信していました。したがって、労働者階級の権利の確立のためには、まずもって、すべての労働者に充実した教育が必要であると考えたのです。

権利としての教育

そしてこのような教育は、支配階級によって政策的に与えられたりあるいは恩恵として与えられるべきものではなく、民衆自身が権利として要求すべきものであるとラヴェットは考えます。彼は、一八三七年に公表した『教育についての提言』において、次のようにのべています。「公教育は権利でなければならぬ、社会そのものから導きだされてくる権利として。なぜなら、社会とは相互福祉のための統合体であり、それはまた結

果として社会のすべての成員の安全と適切な訓練のために公的に保障する統合体であるから」と。

教育の権利思想は、すでにアメリカ独立期の教育計画案や、フランス革命期の教育計画案にも示されていましたが、イギリスでは、マンデヴィルやアダム・スミスやマルサスらしいのがい伝統——貧民教育を支配者の立場から経済あるいは治安と関係つけて考える——がありましたから、ラヴェットのように、労働者の立場から教育をうけることは人間の権利であると宣言したことは、イギリスにおいてはまったく画期的なことでした。かつてトーマス・ペーンは人間の権利を宣言し、ロバート・オーエンは工場法の制定に努力して貧民児童労働者の人道主義的救済につとめ、さらに彼自ら工場主となったニューラナーク紡績工場に性格形成学院を設けて、当時一般の工場でおこなわれていたような貧民子弟を労働力として搾取し消耗しつくすことから解放し、彼らを社会的に保護され教育されるべき人間としての基本的権利を保障する歴史的事業を試みました。ラヴェットもまたオーエンの思想の後継者として、民衆を教育することは政府や富者のほどこす恩恵ではなくて、政府の義務であると考え、そこからさらに、教育をうけることは人間の権利であると確信するようになったのです。

教育構想

それでは民衆の権利としての教育をどのように展開するか？

ラヴェットは次のような構想を描いています。

「必要と思われる地区に、全国にわたって民衆のための公共ホールまたは学校を設ける。このホールは、昼間は幼児学校、小学校、中学校として使用する。そこで子どもたちは身体的・知的・道徳的教育をうける。そして夜は、身体的・道徳的・政治科学についての公開講演、読書会、討論会、音楽会、ダンスなどの健康で理性的なレクリエーションが催され、それによって、労働者を労働の苦勞のあとで教育し樂しませて、彼らが悪徳や有害な習慣に染まることを防ぐ。そこには運動場を設け、遊園、教師住宅、温水ならびに冷水のバス、小博物館、実験室、工作室を設ける。そこで子どもたちは科学の実験をやり有益な職業の基本原理を学ぶようにする」

幼児学校 (Infantschool) は三歳～六歳、小学校は六歳～九歳、中学校は九歳～一二歳の子どもを対象とし、ここまでがすべての子どもが就学する単線統一学校として計画されており、このうえに各分野にわたって高い知識を得るための完成学校または大学がおかれます。全国を学区にわけ、それぞれにこのような教育機関において、三歳から成人にいたるまでのすべての民衆に、政治教育をふくめた多様な教育と娯楽をあたえようと

する計画は注目にあたいます。しかもこれは現状の腐敗した資本家的政府に依頼したり付託したりするのではなく、労働者階級自身が設けるべき教育機関でしたから、従来の教育機関とは根本的に存立基盤を異にしているものと考えられます。また、このようにしていった統一学校体系は、イギリスにおいては注目すべきものと思います。

幼児学校

幼児学校は、以上のような全民就学の単線統一学校体系の基底に位置づけられたもつとも初歩的教育機関でした。これは三歳から六歳までのすべての幼児に開放され、規則正しく出席することが要求されます。幼児学校では教師の資質が重要と考えられています。教師は養成学校の出身者で、一人の女性教師と一人の助手が指導にあたります。ラヴェットは民衆教育のための教師養成を重視していましたから、彼の構想には「町や地区に教師養成学校をつくる」という一項がありました。教師は教室を愛とたのしみの世界にするよう心がけ、また、子どもの身体・知性・道徳教育などについて、はっきりした考え方と指導の適性をもっていなければならぬのです。ラヴェットは、民衆教育のための保育者養成の意義をこのようにしっかりと把握していたのです。

幼児学校の人数については、なるべく少人数からはじめるようにいっています。ウィルダースピンの幼児学校は当時かなり

普及していて、このばあいは、三歳から七歳の貧民幼児を、二〇〇人ときには三〇〇人も保育していました。ラヴェットはこのような大人数を批判しています。一日の保育時間はいろいろの地方の民衆の生活状況によって変わるので、何時間の保育を必要とするかは各学校ごとにきめます。子どもたちには、清潔で登校の時間を規則正しくするよう指導します。日課は、教室とのレスンと、運動場における運動やあそびをかわるがわるすすめます。幼児学校の子どもは、六人から八人の小さいクラスにわけられ、各クラスごとに一人のクラス教師をおきます。クラス教師とは、モニトリアル・システムにおける助教と同じものと考えられます。クラス教師は、レスンにさいしては、そのクラスの出席・清潔・秩序・熟練に注意しますが、一方で、教師はクラス教師がその義務を遂行しているかどうかを観察します。けれども運動場でのあそびでは、クラス教師はとくべつの権限や義務をもっておらず、他の子どもたちと同等に自由にあそびます。ラヴェットの教育の原理は、「いかなる精神的肉体的能力も、適切な練習と運動なくしては教育されえない」ということでしたから、彼は学習にさいしても運動にさいしても、経験主義的・活動主義的原理によっていました。

幼児教育の各論

健康は人間生活のすべてを支える土台として大切なものです。この教育は知性とかかわりなくおこなわれるものではありません。あらゆることについて、子ども自身が「どうして?」「なぜ?」と考えつつ納得して行動することが望ましいのです。それは知識として子どもにあたえるのではなく、子ども自身の体験とおして考え自覚するよう指導するのです。たとえば、きれいな空気と運動は子どもの健康にとって必要なものだということを、ただ子どもに教えるだけではないのです。彼が、なぜ大切なのかを知覚するようしむけ、さらに運動場の適正な運動によって、彼自身がそれらの重要性を感じるようにいたします。「これをしなさい」とか「してはいけない」とかいうことを、単なる忠告や教訓としてあたえることは無益だと、ラヴェットはいつています。犬に棒をはこばせることを教えるように、人間の子どもに命令や服従を強いながら教えてはいけないのです。なぜきれいな空気が必要か、あるいはきれいな空気がなかったらどうしてあらゆる種類の動物が減んでゆかか、教師はかんたんな説明によってわからせます。また身体の各部と機能についても一般的な概念をあたえ、健康にとって運動がなぜ必要かをわからせます。そして、自覚された行為が習慣となって根づくまで、根気よくはげめます。運動は多くの

筋肉を活動させ、同時に合理的なたのしみをあたえるものとして奨励されます。教師は、子どもたちのために適正な運動を計画してやらねばなりません。ラヴェットは、ウィルダースピン・システムの回旋塔を肯定しています。いろいろな動きをあらゆる手の運動も、雨ふりの日の室内運動として有効です。教師はゲームやあそびを計画し、さらに子どもたちのあそびに加わります。体の諸能力が十分に活動したときにこそ、知的道徳的教育のきそが効果的にきずかれるのです。

知的教育について、ラヴェットは、知覚的・比較的・反省的能力の練習なしでは真の知識は達成されえないと考えています。この点については、ラヴェットはあきらかにオーエンの精神をうけついでいます。彼は暗にウィルダースピン・システムを批判して次のようにいっています。

「実在について何ら認知の足しにならない単なる不毛のシンボル、実在について探究したり知識をもったりすることなしで、ただ財宝として吸収された語句——、それらは検証することなしに、機械的方法で、規則や図形や事実や問題として子どもにあたえられる。これらの知識は明瞭な観念をつくりだすことに欠け、反省や判断のための真のきそをつくりあげないから、真の知識とは名づけられない。しかも、このことばの学習、機械的学習、記憶に重荷を負わせる方法は、『教育』の名でもって

なおもつたいをつけられていて、そして、もつとも役立たずのガラクタ物をつめこんだ人は、しばしばもつとも偉大な「スコラ」（学者）として尊敬されている。これを考えれば、多くのスコラたちが実際的で有用な知識をほとんどもっておらず、推論に皮相的などころがあり、判断に欠陥があり、彼らの道徳的義務に欠けているのはおどろくに足らないのではないか？あるいは、学校でのもつとも偉大なのろまたちが、しばしば、多くのつめこみ勉強で知性を害された人たちより利発であることに、おどろく必要はないではないか？」このようにラヴェットは、実物によって感覚に訴え考える知育をすすめたのです。ここには、ルソーや、ベスタロッチや、オーエンの思想が息づいているのを感じます。

しかしながらラヴェットは、ことばの教育を無視していたのではありませんでした。事物の知識を教えるうえで、ことばが大切な役割をすることを知っていました。しかし従来の方法には、ことばと物との緊密な結合が欠けていたので、改良が必要だと考えています。そして彼は「文字箱」を考案しました。これは、教師にもかんたんに手づくりできる文字板をおさめた浅い箱です。ローマ字が二セット、小文字が二セット、その他よく使われる文字を若干余分に備えています。ウィルダースピン・システムではレスンポストが使われていましたが、ラヴェット

トの幼児学校ではリーディング・スタンドが部屋のあちこちに立っていて、この文字箱を支えます。スタンドにひき出しを付ければ、不用のときにしまっておけます。

オブジェクト・レスンのときに、クラス教師は小さいクラスをこのスタンドへつれていき、半円型に並べて、文字箱といろいろな物(オブジェクト)を用意して真中に立ち、ある物をとりあげて子どもたちに名称をたずねます。子どもたちは文字箱から活字をとりだして蓋のうえにスベルします。こうして、事物の名称とむすびつけてことばを学び、しだいに事物の性質に及びます。性質についての学習も、子どもたちの感覚に直接うったえて、ことばの概念をあたえます。こうして書物を使うことなく、有害なシステムもなしに学習がすすめられるだろう、とラヴェットはいつています。数については、ウィルダースピンのアリスメティコンという教具を使って、文字と関連づけながら学ばせることを推奨しています。教師と助手は、クラス教師が指導しているあいだ、全体をみまわりながら監督し、いろいろな質問に応じて活発な話し合いをします。

道徳教育は幼児学校における教育のもっとも重要なものとして位置づけられています。ここでいう道徳教育とは、支配者が被支配者に対して政策的意図的にあたえられる従順と勤勉のための道徳教育ではなくて、民衆自身が自らの社会や政治体

制をきずきあげるための道徳教育であった点で、本質的に意味が異っておりません。道徳教育の基本的な考え方は、人間が本来もっている動物的傾向を、道徳性と知性によって方向づけ、幸福の源泉にしていこう、とする考え方です。また、有用な生産労働が人間に何をもたらしたかを考えさせ、すべての人がそれぞれ有能力にしたがって労働しなければならぬことを理解させます。利己的な野望や競争をさけ、差別をなくし、平等な生活条件のなかで相互的な信頼と愛を育てることが、道徳教育の主要な課題になるのです。

意義

ラヴェットは、労働者階級の政治的権利の確立と彼ら自身による政権の樹立をねがいながら、そのためには、労働者の無知と非道徳を追放し、彼らを教育することによって漸進的な社会改革を期待しました。人間の教育と政治とをこのような表裏の関係に位置づける考え方は、ルソーの「社会契約論」と「エミール」のようです。オージェンの思想をもオーソドックスにうけついでものといえましょう。ラヴェットにとつては、教育は社会改革のための第一条件でしたし、それはだから、労働者の権利の確立をめざす教育だったわけです。さらに、そうした教育を要求することが、とりもなおさず民衆の権利であるという

考え方でした。これは、はつきりと労働者の側にたった労働者のための教育論でした。幼児教育もこのようないみにおいて重視されてきました。わたくしたちはラヴェットを学ぶことによって、わたくし自身が何のために教育しているのか、という教育のねらいについてのつきつめをして、はつきりした考えをもっていなければならないことを知るのでした。

したがって、ラヴェットは、ながいあいだ無知のまま放任されてきた多くの下層民衆をまねにして、どうしたら彼らを一日も早く教養のある人間になしうるか、というさしせまった課題に追われていました。しかもラヴェットの社会改革は、オーエンのニューラナークのようにある小さい範囲の社会的実験ではなく、国全体の改革を意図していましたから、その方法も変わらざるをえませんでした。ラヴェットが、ウィルダースピン・システムやモニトリアル・システムからも技術を吸収し改良しつつ、大量の下層民衆を、労働者自身の経済力によって（彼は現状のような腐敗した政府に教育をまかせることはできないと考えていました）、したがってなるべく経費を節約しながら有効な教育をする術を模索しなければならない現実的な必要にせまられておりました。彼が幼児学校で文字箱をつかうことを考案したのも、このような社会的背景と理由があったからと考えられます。現実に、ラヴェットの、いいかえれば当時の労働者階

級の経済力は皆無でした。現存の政府にたよらないで労働者のための教育をするというねらいをまもりとおすために、彼は中産階級のを借りなければ一つの公共ホールさえつくることができなかつたほど、きびしい状況にありました。ラヴェットは経営にさんさんの苦勞をしたあげく、ついにその公共ホール（ロンドン一八四二年——一八五七年）を閉鎖し、晩年は、労働者教育のための教科書づくりにうちこみました。

わたくしたちは、ラヴェットの業績をみると、彼の生きた時代の状況と彼のおかれた立場から理解しなければいけないと思います。ラヴェットによって、現代のわたくしたちは多くのことを学びうるように思います。

参考文献

W. Lovett & J. Collins ; Chartism ; A new Organization
of the People, embracing a plan for the education and
improvement of the people, politically and socially.

1841

梅根 悟 西洋教育思想史(3) 昭四四

久保 いと W・ラヴェットの幼児教育論(日本保育学会第

23回大会発表論文抄録) 昭四五

(和光大学)